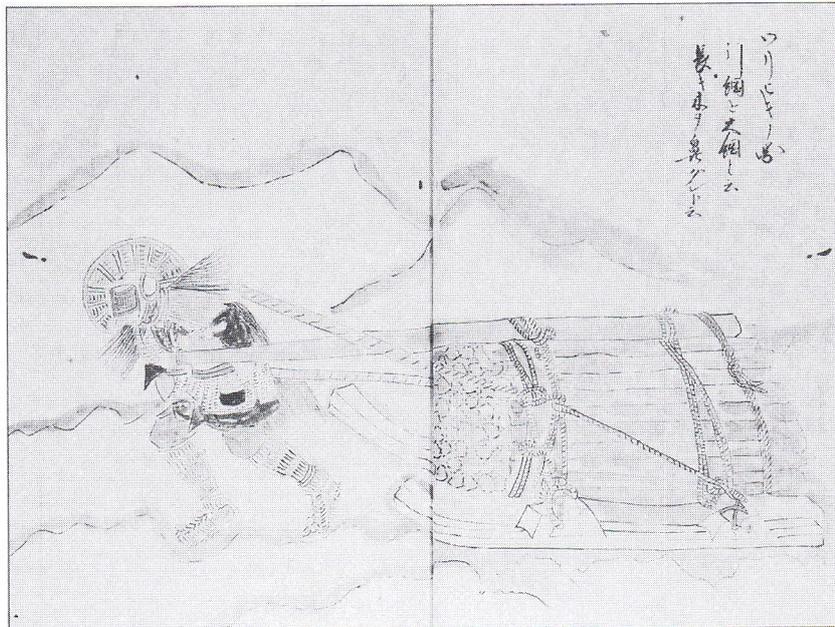


第8章

民俗知識用具



■目簾をつけて轆を引くようす 「北越志」より

医療施設に遠い地域に住んで、最も気にかかることは病人や怪我人の発生であった。医師に往診してもらうにしても、車の通行など思いもよらない時代であり、送り迎えには人手に頼らなくてはならない。しかし急患を病院へ運ぶとなると、一時の猶予も許されない。それが大雪の夜中ともなれば、ムラ中を挙げての大騒動になる。

そんなことから病気になるまで、よくよく耐えられなくなるまで自宅での手当で時を凌いだ。とは言っても、医療の知識もなければ薬もない、富山の薬屋の置き薬や、言い伝えられている民間薬を、あれこれ用いてみるしか

ない。こんな中で熊の胆などは万能薬のように珍重されたが、入手も容易でなく金額も高価であった。

また、冬の厳しい寒さで、子供たちはユキヤケ（シモヤケ＝軽度の凍傷）に、水仕事の多い主婦たちはヒビ・アカギレになり易かった。風邪で併発しがちな百日咳などには特効薬もなく、寒風を防ぐための処置くらいしかできなかった。また、春彼岸のころから始まる雪上での作業では、強い紫外線と寒い風で眼を痛める人が多かった。人々は、民間療法的な方法での予防処置や一応の手当で痛みをこらえながら、その時季を凌いだ。

民間医療のいろいろ

病名	症状	予 防 法 ・ 治 療 法
ユキメ	強い紫外線の作用による眼の障害。 長時間、雪中で作業した後などに起こる結膜の充血・角膜の混濁・痛み・涙などの症状。	〔予 防 法〕 ・メスダレを着用する。 〔治 療 法〕 ・眼にチチ（母乳）を注す。 ・硼酸水で眼をタデる（洗う）。 ・ホオズキを煎じて眼をタデる。 ・ウグイスの卵を潰し油紙に塗って乾燥させたものをツバで溶かして眼にすりこむ。 ・干したハツ目鰻を焼いて食べる。 ・付木に墨で眼の絵を描き、三方に別れた道に置く。 あるいは川に流す。（眼病一般に効く）
ユキヤケ ヒビ アカギレ	ユキヤケ（雪焼け）とは、寒さにより手足の皮膚血管が麻痺・鬱血して、赤紫色になり、腫れてかゆみがかたり、あるいは崩れたりする症状。 ヒビは、寒さにより皮膚が細かく割れることで、アカギレは、指や足の角質の厚い部分が乾燥して割れ目を生じた状態をいう。	〔予 防 法〕 ・テホイ・テッコウを手に着用する。 ・初雪を融かして沸かした湯で手を温めると、その年はユキヤケにならない。 〔治 療 法〕 ・スギヤニを塗る。 ・マツヤニを塗る。 ・ケンボ（ケンボナシ）の実を潰し、その汁を塗る。 ・雪を融かして沸かした湯でタデる。
腹 痛		〔治 療 法〕 ・ジロ（イロリ）で焙った大根を腹にあてて温める。 ・熊の胆を服用する。
風 邪	（のどの痛み・咳）	〔治 療 法〕 ・真綿の首巻を着用する。 ・炒って温めた塩をテヌグイに包んで首にあてる。

春木山と雪眼

春彼岸のころから雪山に入って薪を切り、それを櫓で運ぶ作業を春木山という。この時季になると、それに限らず雪上での仕事が日常のことになるので、顔は真黒に日焼けし、眼は炎症をおこして真赤にしている人が多くなる。

この症状をユキメ（雪眼）といい、誰もがこれで苦労した。このユキメの予防として使われたのがメスダレ（目簾）であった。それは写真で見る形のものだが、蚊帳地の端布などを用い、それに紐をつけて額から垂らして眼を覆う。つまり、眼の前に吊す簾で、これで強い日差しと雪の反射光を防ぎ、冷風も柔らげるといふわけだ。このメスダレは、寛政年間の発行とみられる『北越志』の挿絵（右図）にあることから見て、その歴史は相当に古いものと思われる。その後流行する雪眼鏡より、この方が有効であったようである。

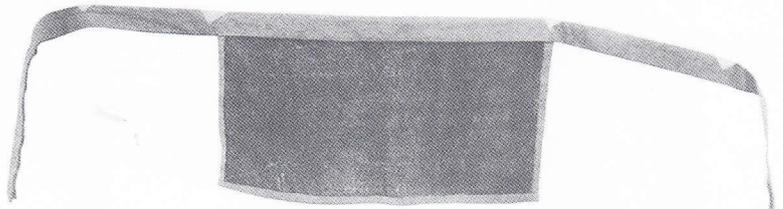
▶ 目簾をつけた男性 「北越志」より



〔雪眼除け等用具〕



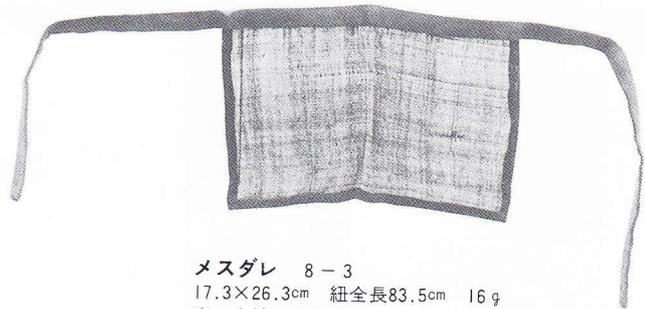
メスダレ 8-1
16.7×25cm 紐全長83.5cm 15g
麻・木綿 遮光具



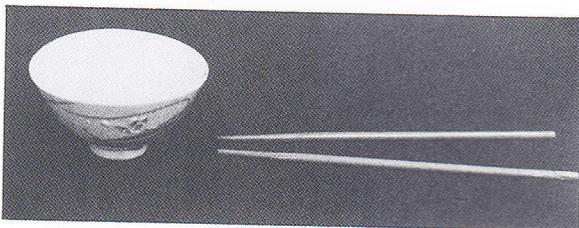
メスダレ 8-2
14.7×26.3cm 紐全長82cm 15g
麻・木綿 遮光具



ユキメガネ 8-4
横幅12.5cm レンズ径4.8cm 20g
ガラス・その他 遮光具



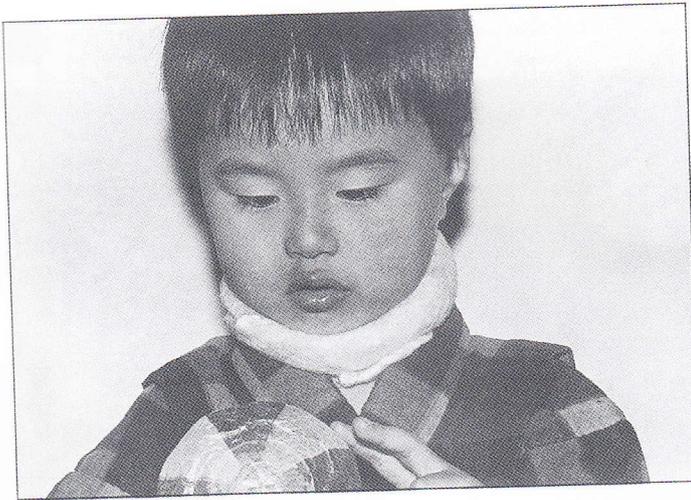
メスダレ 8-3
17.3×26.3cm 紐全長83.5cm 16g
麻・木綿 遮光具



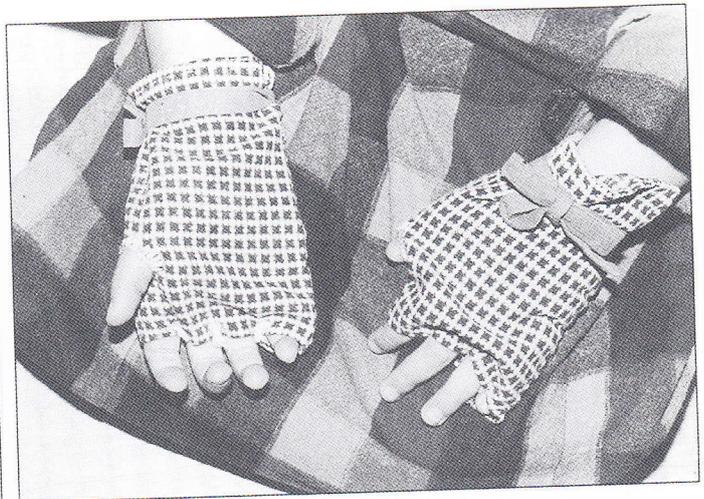
タドウグ 8-5
茶碗径10.7cm 箸長さ22.6cm
陶器・木 雪眼治療用具



ショビン 8-7
胴径17.3cm 全高16.5cm
陶器 溲瓶(排尿便器)

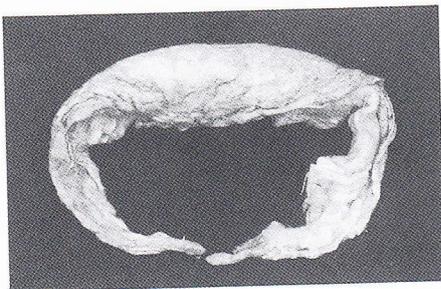


■真綿の首巻を着用した子供

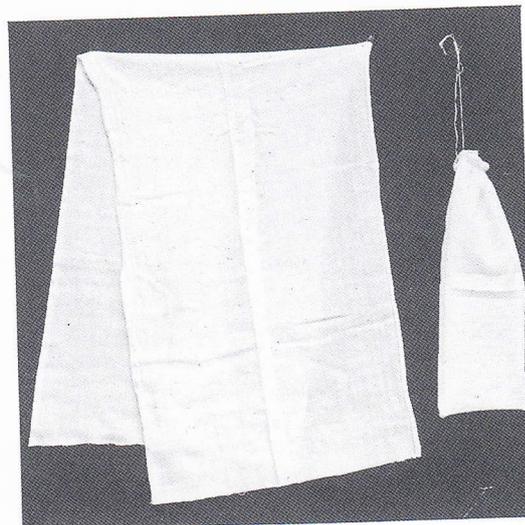


■テホイをつけた状態

〔風邪治療用具〕

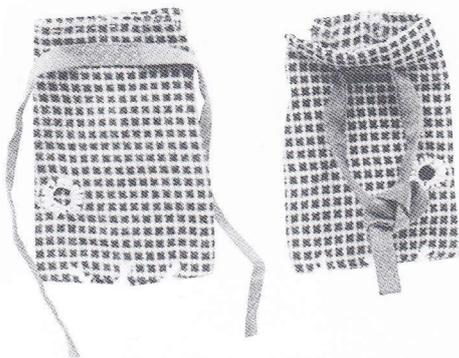


マワタクビマキ 8-9
全長50cm 15g
真綿 喉の保温用

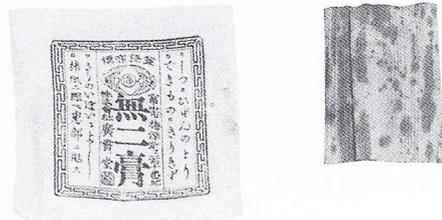


テヌグイ 8-10
手拭92×33cm 袋26.8×13cm 55g
木綿 喉の保温用に温めた塩を入れて首に巻く

〔雪焼け予防・治療用具〕



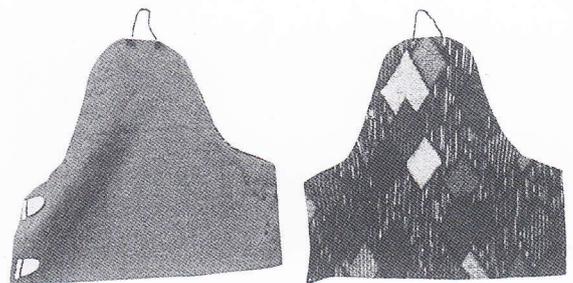
テホイ 8-11
長さ13.4cm 幅9cm 10g (片方)
ネル 手覆い 子供用



ムニコウイレ 8-16
紙袋5.3×5cm 竹皮3.7×2.1cm 厚さ0.8cm
紙袋・竹皮 あかぎれ薬容器



テッコウ 8-12
長さ9.4cm 幅16.5cm 10g (片方)
ネル 手覆い 子供用



テッコウ 8-14
長さ15.1cm 幅17.6cm 16g (片方)
ネル・木綿 手覆い

〔その他用〕



ドビン 8-18
 胴径19.5cm 全高20cm
 陶器(素焼) 煎じ薬用土瓶



クスリブクロ 8-20
 37×26cm
 紙袋 売薬配置用袋



クスリバコ 8-24
 26.5×21.1cm 高さ11.6cm
 桐 売薬配置用箱



クスリバコ 8-22
 27×22.2cm 高さ13.2cm
 桐 売薬配置用箱



クスリバコ 8-23
 20.5×16.5cm 高さ9.5cm
 桐 売薬配置用箱

富山の薬屋

「トヤマ」と言えば、それは薬屋のことであつた。いわゆる配置薬（置き薬）を専門に売り歩く行商人である。大きな重ね行李を黒い大風呂敷に包んで、年に二度くらいやって来ては、各家に適当に見つろつた薬を置いていき、次に訪れた時に使つた分だけ集金して回る。

トヤマは、人々ともすっかり顔馴染みで気心も知れている。それに紙風船などの土産を持ってくるので、子供たちにも人気があつた。喉に真綿を巻いたり、ユキヤケの手にテホイなどしていると、それなりの薬を置いていく。無二膏などもそれであつたらう。

人々はユキメをタデたり、煎じ薬を飲んではいても、トヤマの薬に頼ってみたい気にもなつた。はじめは紙袋（薬袋）であっても、使う量が多い家は、引出し付きの桐の薬箱に変わつていった。病状にもよるが、即効性は確かに新薬の方があつたのだらうと思う。

それはともかくとして、医療施設から遠い雪中住まいの雪国の人々にとっては、一応の安心感がトヤマにはあつた。

●民俗知識用具品目一覧〈計25点〉

- 雪眼除け等用具：メスダレ・ユキメガネ・タデドウグ・ショビン
- 風邪治療用具：マワタクビマキ・テスグイ ●雪焼け予防・治療用具：テホイ・テッコウ・スギヤニイレ・ムニコウイレ ●煎じ薬用具：ドビン・クスリナベ ●その他用：クスリブクロ・クスリバコ